

アルツハイマー型早期痴呆者への 動作法適用の一事例

長谷川明弘（三島病院）

76歳の女性であるクライエント（以下 CI）は同居している娘に連れられて来院した。CIは娘夫婦と3人で暮らしており、娘夫婦は自営業を営んでいた。結婚や就職のため孫が家から離れていくのを機に、この数年 CIは生き甲斐を無くした。元気が無くなっていた。来院する3ヶ月前から「こんな人生を送るなんて・・・」、「死ねば良いんだらうか」、「（娘の）育て方を間違ってしまった」と言うようになり娘と興奮して口論することがあった。CIの親戚には自殺者が多くおり娘は心配になって CIを病院へ連れてきた。

諸検査の結果アルツハイマー型痴呆との診断を受けた。そして医師から Thに心理療法の依頼がありセッションをもった。

初回面接では合同、個別という面接構造で話を聞き Thは方針を立てた。合同面接で娘はカウンセリングを希望し、CIは動作法に関心を持った。そこで Thは娘と CIの個別面接から CIの体験様式を推測し動作課題を設定することにした。Thは CIの体験様式を不能感、不動感、自己存在の不確実感であると推測した。CIへの動作法施行時には娘が同席した。

第2回面接の娘への個別面接で Thは「しばらくここに來ることでおばあちゃんにはどうなっただけほしいですか？」と聞いた。すると娘は「もっと前向きな気持ちを引き出させる」といった。

今回設定された動作課題は肩ひらき、立位での前傾ならびに軸づくりや重心移動、片足感や挑み体験あるいは乗り越え体験、そして自己存在感が得られた。

5回の面接を経て CIは興奮することが減り、近くのデイホームへ通うことや大正琴の練習を始めたり、医師に勧められた雑巾縫いをするようになった。